

**A Japanese translation of Ko Yun-Soo's academic paper:**  
The Development of the Yuseong Hot Springs and  
The Change of Daejon under the Japanese Colonial Period (2)

SHIMAMOTO Masanori

---

Following to my contribution to the last number of this bulletin, I continue to translate Ko Yun-Soo's academic paper: The Development of the Yuseong Hot Springs and The Change of Daejon under the Japanese Colonial Period.

This academic paper describes of the development of the Yuseong Hot Springs and the change of Daejon under the Japanese colonial period. Through this paper in Japanese, I hope to contribute to previous discussions of what happened this age and how to influence it on today.

Key words : Yuseong Hot Spring, Daejeon, Regional Development, Local community, modern colonial city

# 高潤洙 (コ・ユンス)

## 「일제하 유성온천의 개발과 대전 지역사회의 변화」 翻訳 (2)

島本昌典 SHIMAMOTO Masanori

前号に引き続き、高潤洙(コ・ユンス)による論文「日帝下、儒城(ユソン)温泉の開発と大田(テジョン)地域社会の変化(일제하 유성온천의 개발과 대전 지역사회의 변화)」の翻訳を投稿させていただく。論文内でも指摘のある通り、大田は近代以前から多くの人々が暮らしていたソウルや釜山などと違い、1905年に開業した京釜線とともに歴史に登場したいわゆる新都市であった。そしてその大田は、現在150万を超す人々が暮らす韓国有数の大都市となっている。このように発展した大田の礎となったものは一体何だったのか。今回投稿する論文の後半部分には、その発展へのメカニズムが明瞭に述べられている。翻訳をご快諾いただき、質問にも親切にご対応いただいた高潤洙氏に厚く感謝したい。

### 日帝下、儒城温泉の開発と大田地域社会の変化 (2)

#### 第4章 儒城温泉と後背地大田の成長

1930年代は儒城温泉が属した大田郡と後背地の都市である大田面にとって重要な時期であった。1931年に大田面は大田邑に改編され、その翌年である1932年には長きにわたる宿願事業であった忠南道庁の大田移転が成し遂げられた。そして1935年には大田府に昇格することができたのである。この時期の儒城温泉の状況については、次に引用する1932年2月18日付「釜山日報」の記事を通して推し量ることができる。

湖南の温泉として名高い大田の旧温泉は財界の不況および時代の推移と共に、最近は全く発展が無くどんどん衰退していく雰囲気であり、温泉旅館や商店も経営不振に陥っている。道庁の移転で

景気もすぐに回復するだろうという漠然とした期待を抱きつつ、1、2年が過ぎ去ったが、そのかきもなく入浴客は全く増えないばかりか、減少する様相を呈している。このまま放置すれば自滅する以外に道はないであろう。儒城の住民たちは1月から今まで、この状況を挽回する方策を熱心に協議しているが、儒城温泉株式会社の株式の大部分を所有し経営の実権を握っている公州の金甲淳氏が時代の変化に応じた施設を整えることをしないばかりか、消極的な経営で他の温泉に自然と入浴客を奪われている状況である。特に儒城繁栄のための活動に資するために内地人側で組織された共栄会の会長、鈴木松吉氏は多年にわたり金甲淳氏と特別な関係であり住民たちの希望を正直に強く伝えて交渉するには難しい立場であり、住民社会もその希望を会社と十分に意思疎通できていないまま今日に至っているという事情もある。このたび共栄会の役員を替え、新たに片山要太郎氏が会長に推戴されたことを好機として同会では住民たちの困難な状況を詳しく金甲淳氏に伝えるに至ったが、入浴客を呼び込むための方策として同会が提示したことは、一・共同浴場を大改修すること、一・内湯の施設を持つそれぞれの旅館には会社から温泉を配分すること、一・自動車料金を値下げすること、等である。各事項に耳を傾け、会社側に施設改善について強く交渉を行うということではあるが、温泉会社側において住民たちの希望に応じない場合には住民たちは各々生き残りをかけ会社側とは別にあらゆる対策を真摯に講じ続けていくということである。【注49】

この記事は不況にあえぐ儒城の住民たちが共栄会を再組織し、儒城温泉(株)の実質的な主であった

金甲淳に民意を伝えた様子を報じている。儒城の住民たちとはいうものの、記事を読むとこの共栄会の役員と会員たちは大部分が儒城に旅館や商店などを持つ中小の自営業者であったことがわかる。

「温泉村」をはじめ、韓国の聚楽構造やその形態についての全国的な調査を行った善生永助によると、1930年代はじめ儒城旧温泉には金甲淳の儒城温泉(株)以外にも「勝利館」「上盤館」「彬山旅館」「温泉旅館」「霊泉旅館」など4部屋～9部屋の客室を備えた中小の温泉場が営業を行っており、いわゆる「御下宿」という名で家を貸す貸与業者もいくつか存在した。このような状況は旧温泉だけでなく新温泉も似通っており、鳳鳴館の近くには「平壤旅館」「鄭興旅館」「朴炳琦旅館」「萬年旅館」などの小規模温泉場が存在していた。すなわち、この時期の儒城鳳鳴里一帯は言葉通り一つの「温泉村」を形成していたのである。【注50】

記事の中で言及されている不況とは、1927年の日本本土における金融恐慌に始まり1929年の世界恐慌を経て朝鮮にも大きな打撃を与えた昭和恐慌を意味していると考えられる。しかしそれは儒城だけの問題ではなく、植民地朝鮮全体の問題であった。【注51】その上この時期の大田は忠南道庁の移転を成し遂げ、庁舎新築をはじめとした各種建築事業の発注を通してある程度の安定を取り戻しつつあった。【注52】一方、記事の題目は「設備を改善しなければ自滅の悲運に逢着」であるが、金甲淳は1933年頃から再び大規模投資を行い1936年に20万円の工事費をかけ現代式(西洋式)ホテルを儒城温泉に建設した。【注53】

よって結局のところ先の新聞記事は儒城温泉の衰退をあらわにするというよりは、繁栄した儒城温泉の内部で進行した業者間の格差を伝えるものとなっている。1920年代に満鉄と金甲淳を通じて大資本が流入して施設の規模が大型化し、営業利益に直結する交通網まで大きく改善されると、いくつかの小規模温泉旅館と商店が参入して営業を始めたのだが、それらと儒城温泉(株)や鳳鳴館といった大資本との関係は、大資本に大変依存的または不平等に設定されていたのである。【注54】

不況を打開するために共栄会が提示した方法にも、すべてこのような格差を見てとることができる。共同浴場の施設改修と自動車料金の引き下げは、すべて温泉利用の費用を抑えるためのものであった。すなわち、儒城温泉(株)の高級施設やいわゆる貴族風の鳳鳴館を利用することが難しい相対的に経済

水準が低い層を主な顧客層としていた零細業者にとっては、営業利益に直結する重要な問題であった。【注55】そして「内湯設備を備えれば配湯をしてほしい」という要求もまた、試掘を通じて源泉を確保できていない中小の後発業者には敏感な事柄であった。配湯にまつわる葛藤については明示的な記録を見つけ出すことができないが、釜山東萊温泉の場合、配湯の問題は業者対業者、業者対当局間において頻繁にいさかいを引き起こしている。【注56】

このように1930年代の儒城温泉は規模の拡張とともに、資本力の差によって階級化された構造を持つようになった。しかし儒城面の村勢は大田郡内の他の面に比べて、かなり良好であったように見受けられる。1939年の大田郡内における家屋税賦課額と納付額をみると、儒城面の賦課額は56,648円と最も高かった。そして納付額もまた56,648円と100%の徴収が達成されている。ところが他の面の納付率は大部分が30%未満であった。【注57】もちろん他の指標も併せて検討しなければならないが家屋税だけを基準とした場合、1930年代末の時点で儒城面は大田郡のなかで経済的に最も裕福であり、その状態もたいへん安定的であった。そしてこのような自信感からか1935年の大田邑から府への昇格に際し大田郡から分離されるや、儒城面は率先して「郡廳移轉期成會」を組織し、大田邑にあった郡庁の誘致を推し進めた。

きたる10月1日から大田邑が府に昇格することに伴い、大田郡の名称が何になるのかという話題が上がる今日に突然、さる10日儒城面において大田郡廳移轉期成會が組織され、12日には代表として儒城面長朴廣熙氏ほか3名が面住民4百余名の署名した陳情書を持って道庁へ陳情に行くという。儒城方面の人士の言葉によると、移転にあたって当局者一部の賛意を得た模様で、意外にもすぐに進展を見せるかもしれないという。陳情書の内容によると、儒城の発展は大田発展の重要な要素の一つであると同時に、大田としては少しの譲歩で大きな利益を得られるとして、大田発展への大計を立てよということだという。【注58】

大田郡内の他の面も郡庁の移転を望んでいたが、当時の新聞を通して見たとき期成会を組織して本格的な誘致運動を繰り広げたところは儒城面が唯一であった。或いは、他の面の誘致運動が記事化されていないということもあり得るが、儒城面が最も積極

〈表5〉 儒城温泉(株)企業現況 (1935-1941) 【注60】

年度	資本金 (円)	社長	専務理事	理事	監事	株式	大株主
1935	200,000	金潤煥	金甲淳	小澤清 鈴木松吉	吉原秀熊 林昌洙	(株式) 4,000 株 (株主) 10 名	金甲淳 (2,000) 金潤煥 (1,500)
1937	200,000	金甲淳	-	小澤清 吉原秀熊	鈴木松吉 林昌洙	(株式) 4,000 株 (株主) 10 名	金甲淳 (2,000) 金潤煥 (1,500)
1939	200,000	金甲淳	-	吉原秀熊 金東周	鈴木松吉 林昌洙	(株式) 4,000 株 (株主) 10 名	金甲淳 (2,000) 金潤煥 (1,500)
1941	200,000	金甲淳	-	吉原秀熊 金東周 小澤清	鈴木松吉 林昌洙	(株式) 4,000 株 (株主) 10 名	金甲淳 (2,000)

的であったということだけは明らかである。儒城面の郡庁誘致論理は記事にある通り「儒城の発展がすなわち大田の発展」ということであるが、これは儒城温泉の開発初期段階から提起されてきた一種のローガンであり、儒城温泉の後背地である大田の地域社会が儒城温泉に抱く期待でもあった。【注59】

このことに関連してさらにもう一つ重要な事実は、この時期に儒城温泉(株)の経営陣にも一定の変化が生じたという点である。1920年代以降排除された大田の有力者たちが、1930年代中盤になると再び会社の経営に合流したのである。

理事である小澤清は大田にあった忠南無盡株式会社충남무진주식회사の常務理事であり、大田物産会社理事、大田皮革株式会社監事などを担っていた金融業者であった。また小澤は同年5月大田邑議会選挙に当選したのち、その年の11月には再び府議会選挙でも当選し、初代大田府議員になった大田の有力者であった。【注61】1935年に幹事として在籍し1937年から理事になった吉原秀熊もやはり大田魚菜市場の理事であり、1937年に大田商工会議所の議員に当選した大田の有力者の一人であった。そして唯一の韓国人理事であった金東周は大田府の映画館だった警心館경심관の経営者であり、この金もまた大田の人物であった。【注62】

監事林昌洙は公州邑に事務所を持つ弁護士であった。林は1924年と1933年、1937年の3次にわたって忠南道評議員に当選した公州の実力者であったが【注63】、会社の実質的な経営とは距離がある監事職であり、林以外の理事陣がすべて大田の有力者たちで占められていたという点から、1930年代中盤に儒城温泉(株)の経営陣は公州の有力者たちから大田の有力者たちへと交代したとみることができる。これは儒城温泉(株)の内部に大田の人的、物的資源が再び流入することで儒城温泉と大田地域社会がさらに密着したという事実を反映しているといえる。

しかし、ともするとこのような評価は大きな意味はないともいえるかもしれない。その理由は1932年の忠南道庁大田移転と1935年の大田府誕生によって、公州と大田の競争は事実上大田の勝利で終わったからである。金甲淳もまた道庁移転を予測し前もって財産の相当部分を大田に移した状態であったことから【注64】、儒城温泉の経営陣はもちろん、資産そのものも大田の中に引き込まれていったことは自然な結果であるとみることができる。

以後、大田地域社会の内部でも儒城温泉を単なる観光名所ではなく地域発展の一つの軸として認識する雰囲気분위が形成された。次は忠南道庁移転が完了した直後である1933年1月に《朝鮮中央新聞》主催で開かれた「大田発展新春座談会」に参席した朝鮮殖産銀行大田支店長中村孝嗣の発言で、中村は「神の加護」という表現を使って儒城温泉の重要性を強調した。

(私は)大田の発展策についていくつかの研究をしてまいりました。またそのために専門学校を卒業したわが行員に「大田の発展策にはどのようなものがあるか?」という論文を提出させましたが、そのなかで「近代都市の要素として付近に娯楽地、遊園地を備えており、必ず市民に安らぎを与えるものがなければいけない。神の加護か大田には儒城があるにも関わらずまだ発展はしていない。大田はなぜ儒城を興せないのか。大田はそれをととても軽く考えている。他の都市にはこれほど有力なものはない」と述べたものもありました。【注65】

同じ年の8月に大田實業協會が主管した「儒城温泉発展座談会」も開かれたが、協会長であった村尾伊勢松は記者たちに大田地域経済の観点から「自動車運賃の引き下げ」、「新旧温泉の合併」、「儒城温泉の民衆化」問題など、儒城温泉の経営全般に関する



自身の考えを明らかにした。決定的に村尾は「儒城温泉の繁盛は大田発展の前提」とし、面の出身者として道庁移転以降さまざまに検討されていた大田の発展談論に儒城温泉を深く引き込んだ。【注66】

地域社会の内部でも儒城温泉を大田の資源として積極的に広報することが始まった。一例として、1936年末から1937年はじめにかけて大田の有力者たちは南鮮電気株式會社の本社誘致運動を推し進めたが、競争相手都市であった大邱と釜山を前にして大田は株式保有量と電気使用量においてこの2都市には匹敵できないが、「大田には儒城温泉があり、住居環境がよく、保健上においても適合である」という論を展開した。【注67】儒城温泉と大田の発展が互いに連携しているという考えは、先に述べたように儒城温泉が開発されたときである1910年代はじめから存在していた。しかし1930年代中盤以降、このように洗練され明瞭になった観点と論理は公州との長い首位都市争いに勝利したのち、大田地域社会が持つようになった自信と期待の中で、明らかに新たに再文脈化されたのであった。

## 第5章 まとめ

「儒城温泉の発展はすなわち大田の発展」という表現は、日帝下儒城温泉の開発とそれに対する投資を強調する地域言論および有力者たちのお決まりのレトリックであった。20世紀になる前までに限っても全く存在しなかったかあるいはほぼ無名無実であった大田は、1904年の京釜線鉄道敷設とともに今でいう一種の「新都市」として歴史に登場した。しかし鉄道のほかには地域内の資源が皆無であった大田は、外部の資源を取り入れるか略奪する方式で都市の発展に乗り出した。【注68】

一方、儒城温泉すなわち儒城面鳳鳴里一帯は近代以前の時代からずっと公州圏域に属し、1914年大田郡新設とともに行政区域上において大田面とともにまとめられたが、大田面のエリア内に入れるには距離的に制約が大きかった。しかし、いち早く温泉が有名な事業になるであろうということを悟った先見性ある大田の日本人有力者たちは、儒城温泉に投資を行い、外部からの投資もまたこれに続いた。儒城温泉の開発は周辺にも小さくない影響を与えたが、最も大きなものは大田面を中心に構築された既存の鉄道網が新たな陸上大衆交通と連結して儒城温泉まで拡張した、交通インフラの拡充であった。

ところが1920年代中盤、儒城温泉は金甲淳をは

じめとした公州の有力者たちの手に渡ることになった。それは儒城温泉の発展速度に新興都市大田の資本力が追いつけず、当時大田の上位にあった忠南の伝統的首位都市公州の経済圏にしばしば渡ってしまったのである。それにも関わらず、ともあれやはり儒城温泉に最も近い背後都市は大田であり、大田が成長していくことに伴って儒城温泉は再び大田の有力者たちとその経済圏の中に再還元されたのである。「儒城温泉(株)」に代表される旧温泉の場合、最も強大な実力者は金甲淳であった。しかし先に述べたように、1930年代中盤にいたると、金甲淳はすでに公州という小邑だけの有力者ではなく全国的なレベルでの有力者に成長し、不動産をはじめとして所有する資本の相当部分が大田に移されていたということを想起せねばならない。これに加えて、公州と大田の首位都市争いもやはり1932年に成された忠南道庁の大田移転と、1935年大田府昇格を契機として事実上大田の勝利に終わったのである。

ところが1935年大田府の誕生は、行政区域上とともにまとめられていた儒城面が大田から引き離されるということでもあった。しかし以後大田と儒城、正確には大田府と儒城温泉の関係は戦略的にお互いさらに緊密になったのである。忠南道庁移転と前後して大田では「大大田建設」という単語が地域社会の話題にのぼった。1920年代に導入された「都市計画」という近代都市の新たなアジェンダが1934年の「朝鮮市街地計画令」制定を通して現実的な課題となり、1930年にすでにその下絵を完成させた大田は、1937年大田府協議会の議決を通過した「大田市街地計画案」を最終告示した。【注69】この都市計画案には儒城温泉が含まれていなかったが、その理由は儒城温泉が大田府に属する地域ではなかったためである。しかしそれにも関わらず、先に例示したように儒城温泉をして「神の加護」云々とした銀行家や、大田の優れた定住の与件を儒城温泉と関連させた大田の有力者たちの姿勢を見ると、当時「近代都市」あるいは「文化都市」建設を志向してつくられた野心あふれる大田都市計画において、儒城温泉がどのような意味と重みを帯びていたかは明らかである。

ここに一つ興味深い例を付け加えるとすれば、1933年日本のピクチャーレコード社より、音盤番号52329号を付した1枚のレコード盤が発売された。この音盤の前面には「大田小唄」が、裏面には「大田行進曲」という歌が載せられていた。作曲者は日本の大衆音楽史において最初の演歌と評価を受ける

「カチューシャの唄」を作った人気作曲家、中山晋平であった。中山が作曲した大田行進曲の歌詞には次のように儒城温泉が登場する。「ポップラ色づき旗雲燃える、温泉儒城はあの丘あたり／旅の一夜の湯槽の情、偲ぶあの妓も故國生れ／雪のオーバをさらりと脱いで圍むストヴ男と男／とつと笑つて盃乾せば、窓に凍てつく北斗星」。もちろん、これ以外にも大田行進曲には「モダンな忠南道庁舎」や「蘇堤洞の野球場」「宝文山」なども登場する。しかし、このなかでも儒城温泉は全体の歌詞において少ない部分を占めており、魅力的な近代都市である大田をアピールする素材として積極的に活用された。

#### 【注70】

この歌を誰が何の目的で作し、普及させたのかは明らかでない。しかし中山晋平は大田の歌に先立ち1931年に京城小唄と大京城行進曲も作曲しているが、すべて京城日報社の依頼を受けてのことであった。1932年コロンビアレコード社の古関裕而が作った大邱小唄と大邱行進曲もやはり大邱の新聞社であった朝鮮民報社が歌の制作と普及を主導した。

【注71】大田小唄と大田行進曲には明確な記録は存在しないが、他の都市の状況と照らし合わせると大田もまた地域の新聞社において制作を主導した可能性が高い。当時大田にあった大田忠南唯一の地域新聞は、1932年ごろ湖南日報から名前を変えた朝鮮中央新聞であった。【注72】日帝下では地方の新聞社は地域のニュースを知らせることのほかにも、地域の利権を擁護し当該地域有力者たちの政治活動の場としても機能した。社長も大部分の新聞社が地域の有力者であった。そのような点を考慮すると、地域社会の力量を集中させて都市計画を樹立し、それを通じて大田建設という目標を達成しようとした者たちが大田行進曲のような歌を作ろうとしたとするならば、その理由は容易に推し量ることができる。

20世紀のはじめ日本人たちの移住とともに大田という都市が建設されるころ、その日本人移住者たちによって再発見された儒城温泉は、以後開発過程を通して大田の不足した都市インフラを拡充させ外部の多様な資源を地域社会内に引き入れる役割を果たした。その後も儒城温泉は休養と観光という本来の役割を通じて地域経済に寄与したことはもちろん、1920・30年代の都市計画や近代都市談論において、優れた定住与件を提供する大田の重要な資源としてその役割を受け継いでいった。

終わりにもう一つ、先に述べた「儒城温泉の発展はすなわち大田の発展」という当時話題になった一

種の地域発展談論の中には、より深い政治・社会的含意が存在するという点を強調する必要があるだろう。ここには儒城温泉と大田の発展が互いに関連しているという文字的な意味を超えて、植民地時代の地域開発と都市化のメカニズム、そしてその結果生じた不平等の深化、つまり内部の格差や階級といった問題もまた、儒城温泉と大田がともに共有していたという意味も含まれているのである。1930年代、一定規模の温泉村(温泉地区)を形成した儒城温泉内に生じた温泉業者間の葛藤、そして筆者のこれまでの研究で取り上げてきた大田発展の過程において形成された地域社会内部の格差などがその例である。そのような意味から儒城温泉と大田は、依然としてお互いがお互いを説明し合える多くの部分を余しているといえるのである。

#### 【注】

##### 注49

《釜山日報》1932.2.18. ‘設備を改善せねば自滅の悲運に逢着儒城舊温泉浴客減退に共榮會奮起し對策攻究’

##### 注50

善生永助『朝鮮の聚落(中篇)』(朝鮮総督府、1933) pp.402-403。旧温泉と新温泉は一定部分互いに競い合う関係ではあったが、1928年6月には両方の温泉を結ぶ道路が新設されるなど協力的な関係も大きかった。新旧両温泉の移動距離が縮まることで、儒城温泉自体が大きくなる一種の市場統合効果が生じたと考えられる。

##### 注51

昭和恐慌が朝鮮に与えた影響については、キムジョンヒョン(김종현)『近代日本経済史(근대일본경제사)』(韓国:飛鳳出版社、1991) pp.215~216、及びソジョンイク(서정익)『戦時日本経済史(전시일본경제사)』(韓国:ヘアン、2008) pp.208~209参照

##### 注52

昭和恐慌期における大田の経済と恐慌に対する大田地域社会の克服努力については、コユンス、前掲論文、2018、pp.98~100参照

##### 注53

《毎日申報》1933.12.9. ‘儒城温泉發展策’及び《朝鮮中央新聞》1936.8.9. ‘新興大田のオアシス、儒城温泉を訪ねて’

##### 注54

このような状況はいわゆる温泉業者にだけ該当することではなかった。1939年2月、儒城温泉(株)自動車部所属の運転手20余名が一時的なストを断行した。ストの理由は低い賃金であった。当時運転手たちは日当90銭~

1円60銭までを受け取っていたが、ひどい低賃金であると訴え、1円30銭～2円50銭までの引き上げを要求した。しかしこれに対する会社側の対応は大変高圧的で賃金の引き上げは許可されず、他の待遇については改善を考慮してみるとの回答であった。(《朝鮮日報》1939.2.9. ‘温泉車部運轉手 廿餘名一時盟罷’)

注55

1933年12月9日付《毎日申報》には、「儒城温泉発展策」という見出しで、地域各界の有力者たちのインタビューが掲載された。儒城温泉発展のため必要なことに対して金甲淳は「何より資本金」と強調する一方、儒城公立普通学校長の竹迫を除く残りの儒城面長朴廣熙など5名の有力者は皆「自動車運賃」に言及した。儒城温泉(株)に属する自動車部を運営していた金甲淳にとって自動車運賃の値下げは、収益を下げるという要求に他ならなかった。しかし、自動車運賃値下げによる儒城温泉利用客の全体的な増加は儒城温泉業者たち多数の収益を増大させることのできる方法であった。すなわち、自動車部を所有していた金甲淳と他の業者とは「利益の均衡点」が異なっていたのである。

注56

公衆浴場のほかに温泉浴を楽しむためには内湯を備えた温泉旅館を利用しなければならないが、小規模な旅館で内湯を持つところは多くなかった。内湯設備を備えているといっても元となる温泉の供給を受けねばならず、それらを保有する業者との協力が成されない場合、施設自体を運営することができなかつた。もし新たに源泉を掘削すると、これまであった源泉の湯量が減少したり枯渇したりする事態が発生しかねないため既存業者たちの反対が強く、それによって許可自体も容易ではなかつた。このことに関する東萊温泉の事例に関しては、キムスン、前掲論文、pp.244～253参照。

注57

〈表4〉大田郡内における家屋税徴収状況(1939.5.16現在)

単位：円

面名	調査額	収入額	備考	面名	調査額	収入額	備考
外南面	34,498	850	2.4%	炭洞面	39,077	13,679	35.0%
山内面	29,127	8,194	28.1%	儒城面	56,648	56,648	100%
東面	32,949	4,698	14.2%	鎮岑郡	34,419	689	2.0%
懷徳面	24,963	5,318	21.3%	杞城面	43,933	5,230	11.9%
北面	42,834	8,567	20.0%	柳川面	38,926	947	2.4%
九則面	35,888	17,983	50.1%	合計	413,264	155,629	37.6%

出典：《東亜日報》1939.5.21(7面)「第1期家屋税」

注58

《東亜日報》1935.7.14. ‘大田郡廳을 儒城에서 移轉運動’

注59

「(儒城温泉の開場は)大田繁榮の助けとなること甚大なり」《毎日申報》1913.12.16. ‘大田繁榮의 一助’、「(儒城温泉の工事によって)大田の景気は一層好況を呈する

であろう」《毎日申報》1914.5.15. ‘大田温泉空士’)等注60

『要録』(1921-1942版)を土台に作成したもので、会社の名称は1923年版までは大田温泉(株)、1925年版以降は儒城温泉(株)と記載されている。

注61

朝鮮功勞者銘鑑刊行會、前掲書、1935、p494；《毎日申報》1935.5.22 ‘朝鮮地方自治의 劃期的 進展’

注62

《毎日申報》1937.7.19付「大田警心館主 奇特な 獻金」。他の理事たちと違い金東周については警心館の「経営者」であったということ以外、他に記録が残っていない。警心館は1931年に開館した映画館兼公演場で主人は金甲淳であった。(《朝鮮新聞》1931.12.23. ‘大田警心館 盛大に上梁式’)よって金東周のちに金甲淳から警心館を引き受けた可能性と、金東周が単に雇用された社長であった二通りの可能性がある。また金東周と金甲淳が親類縁者といった特別な関係であったということもありえるかもしれない。このように金東周については大田の有力者であったと確定するには不明瞭な部分があるが、金東周を除いたとしても1935年から1941年まで大田の有力者たちが儒城温泉(株)の経営に関与した主体であったという事実は大きくは揺らがない。

注63

トンソンヒ(동선희)『植民権力と朝鮮人地域有力者(식민권력과 조선인 지역 유력자)』(韓国：ソニン、2011、pp.398～401)

注64

公州の忠南道庁移転反対運動当時、金甲淳は公州で選出された道評議員であったにも関わらず、道庁の大田移転を支持していた。公州の有力者たちを紹介した《東亜日報》1938.5.22付特別版紙面にも金甲淳の蓄財秘訣の一つとして「忠南道庁の大田移転を予想し前もって道庁予定地近くに土地と建物を買っておくこと」を挙げているが、実際に1938年の基準で大田の総市街地57万8千坪のうち、金甲淳所有の土地は22万坪であった。大田市内の土地の約38%が金甲淳の土地であった。(チスゴル、前掲書、pp.161～162)

注65

《朝鮮中央新聞》1933.1.19. ‘大田發展 新春座談會(三)’

注66

《群山日報》1933.8.23. ‘儒城温泉 發展座談會’

注67

《朝鮮民報》1936.12.25. ‘本社誘致陳情に 舌端火花を散らす’及び同新聞、1937.1.18. ‘南鮮電氣合同本社 誘致期成會を設置’

注68

これに対する具体的な例はソンギュジン (송규진) 「日帝強占期初期植民都市大田の形成過程に関する研究 (일제강점기 초기 '식민도시' 대전의 형성과정에 관한 연구)」『亜細亜研究』45号 no.2 (韓国: 高麗大学校亜細亜問題研究院、2002) およびコユンス、前掲論文、2018参照

注69

〈湖南日報〉 1930.5.16. '大大田を祝福する都市計劃の草案'; 〈郡山日報〉 1937.10.22. '大田の市街地計畫 原案通り決定'

注70

大田行進曲の歌詞全文は阿部薫編『朝鮮都邑大觀』(京城: 民衆時論社、1937) p.24

注71

ソンテリョン (손태룡) 「日帝強占期大邱の歌の考察 - 大邱行進曲、大邱小唄、大邱府民歌を中心に (일제강점기 대구노래 고찰 - 대구행진곡, 대구소패, 대구부민가를 중심으로)」『大邱慶北研究』12号 no.2 (韓国: 大邱慶北研究院、2013)

注72

必ずしも地域新聞社でなくとも、このような歌は当該地域の有力者たちが主導して作られた可能性が最も高い。主要レコード会社は大田小唄や大田行進曲のような歌を純粹に市場性だけを考慮してレコーディングしたとは想像し難い。1930年代に作られたこのような多くの曲は徹底して「注文者生産方式 (OEM)」にて制作されたと考えられる。